

タイ文学の視点から

タイの民間歌謡など

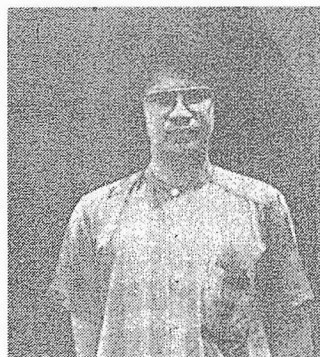
岩城雄次郎

はじめに

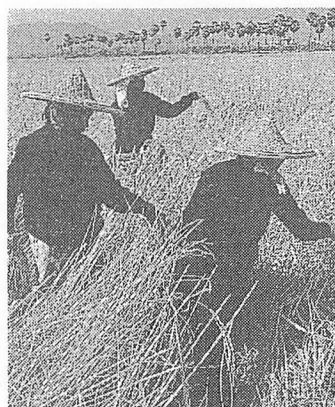
そもそも今のタイ国に、タイ族を主体とするスコタイ王国が成立したのは、1240年ごろのことである。当時アンコールの宮廷により、クメール帝国の西北地方統治のために派遣されていたタイ族の太守が、近隣のタイ勢力と連合してクメール帝国の支配から脱して成立させた王国で、先住民族はモン・クメール族であった。タイ文字が出来たのは1283年のことで、スコタイ王朝第三代目のラームカムヘーン大王が、クメール文字をモデルにして創った。タイに歌が発生したのは、もちろん文字が創られる以前のことだと思われるが、残念ながら当時どのような歌があったのかを裏付ける資料は見当たらない。

スコタイ王国は1438年に滅び、その約300キロ南の地点に、1351年に起こったアユタヤ王国に吸収されてしまうのだが、そのアユタヤ王国は、1767年に襲来したビルマの大軍に焼き滅ぼされて、重要な文化財や資料の多くが消えてしまう。宮廷を主体とする王朝文学は辛うじて後世に伝えられたが、民衆の文化を伝える民間で詠われたものがどのようなものであったかを伝える資料はない。タイに伝えられたジャータカを起源とする民話や地方独自の民話、それらに取材した古典文学の作品などから、あるいは先住民族モン・クメール族の文化遺産から、タイにおける「うた」の発生やその発展をたどる研究は、まだタイでもそれ以外の国でもなされていない。しかし、稲作農耕文化を母体とするタイでは、季節の移り変わりに伴う、農耕に関わる様々な仕事、例えば田植えや稲刈り、そして仏教に関する種々の年間行事などに合わせて、生活を楽しむための歌謡がいつからか発生し、それが今もお歌われている。その他に考えられるのは、職業的な歌手（これが存在したことは、古典文学の作品に裏付けられる）が歌う貴族や農民のための歌謡で、それには「女性や男性の美と魅力を称える歌」、「葬儀の歌」や「乞食の歌」などがある。

さて、ここではタイの民間歌謡について研究をしているアネーク・ナーウィツカムーン氏の著書『世紀外れの歌』（1978、バンコク）の内容に沿って、民間歌謡の紹介をさせていただきたい。



アネーク・ナーウィツカムーン



稲刈りの風景

【雨季の歌】

タイの雨季は多少の地域差はあるが、中部はほぼ5月から10月までで、後のほぼ半年が乾季となる。

(1) 舟遊びの歌

タイの中部地方でよく歌われる。何人かの仲間が船に乗り、クラップ（拍子木）やチン（タイのシンバル）などで拍子を取りながら皆で楽しく歌う。この歌がいつ頃から歌われるようになったのかは、不詳。

(2) ナージャイの歌

安居（僧侶が外出を避け、寺にこもって修行に専念する3ヶ月間）が明けたころ、またはカティン祭の季節（安居明けの翌日、つまり陰暦11月下弦の第1日から数えて30日以内のいずれかに日に、各々の寺で僧衣献呈の儀式が行われる）に歌われる。数人の男女が車座に座って楽しく長々と、少なくとも数時間、ときには一夜が明けるほど歌い明かすのが常で、酒や焼き魚が良き友となる。ジャイウーイ（何故？）で歌い始める歌。

(3) クルングトーンの歌

この歌については、過去の文学作品の中で詩人ストーン・プー（1786～1856）が言及しているが、いつのまにか消えてしまったようで、今は歌い手も歌詞も見当たらない。ラーマ5世時代（1868～1910）に消滅してしまったのだろうか？

(4) さすらいの歌

中部のパトゥムターニーにあった歌で、安居明けの頃にソー（胡弓）を弾いてあてもなく旅をしながら、農家の人に米を乞うための歌である。『ラデンランダイ』という文学作品の中にそのことが書かれている。

(5) ローイパンサーの歌（安居明け近くの歌）

タイ中部地方のカーンチャナブリー県にのみある歌で、40代以上の歌い手がみすぼらしい服装をしてあちこちの農家を訪れ、皆さん徳を積みまじょうと歌いかけ、家を褒め、家の主人の善意を褒め上げる。そして、米や他の農産物などを貰い受けると、祝福の歌、別れの歌などを歌ってから、次の家へとあてもなく徒歩で移動する。

【稲刈り・打穀の歌】

(1) 稲刈りの歌

稲刈りの季節が訪れると、農民は助け合って稲を刈りながら、各自が知っている歌、好きな歌、得意な歌などを愉快そうに歌って楽しむ。稲を刈っている最中に歌うものには、次のような歌がある。

母さんよ、稲を刈って	あんまり脇見をしないでさ
鎌で手などを切らないように	
しっかり握ってよ、お母さん	せっせと刈って畔まで着けば
母さんとお話出来るから	
しっかり刈ってよ、おばあちゃん	朝顔菜やヤーワイ（草の一種）で
稲束を縛ってあげる	
しっかり握ってよ、お母さん	朝顔菜や水草を
それ、拳いっぱい取ってください	

(2) 穂握りの歌

こちらの畔からあちらの畔へと歌って踊り続けるもので、稲を刈りながら歌うものではない。男女が円陣をつくるか、あるいは向き合って、左手に黄金色の稲穂を掴み、右手には鎌を持って舞い踊る。拍子を取ったり手を叩いたりすることはない。注意すべきことは、鎌を持っているので、互いの距離をあまり近づけないことである。その特徴は、誰かが歌い出すと、歌の合いの手が「へー……へ」または「へー・アオ・へー・へー」と受けることになっている。中部地方によく見られる。

(3) ♪ (鎌踊り)

中部のナコンサワン県パユハキーリー郡で歌われるもので、後ほど芸術局が「鎌踊り」ということばを付け加えた。曲は前者「穂握りの歌」とは違って、男女が円陣をつくって踊るとき、女性が外側に、男性が内側にいてラムウォング踊りと同じ調子で踊る。男女一組が先頭に立ち、対話をしながら踊り進むと、合いの手が「チャチャー、チャチャー、チャーチャー」と言ってリズムを取る。

(4) ノーネーノーナートの歌

中部地方パトゥムターニー県にある歌で、村の人々が助け合って共同作業をするときに歌う。「ノーネー」というのは「ほっそりとした」という意味。「ノーナート」は不詳だが、「ゆっくりと」という意味に取れる。次のような歌がある。

ほっそりとしたいい女	あなたの歩き方は優雅でゆっくり
僕は君が好き	寄りかかりたいほどに
僕の心をシロスズメナスの木のところに入れておく	
僕は何で徳を積んだらいいの	
赤い布を着ている女と一緒にするために	
(そして合いの手が言う)	
ああ、なんとすばらしい女	ほっそりとしたいい女
ノーネー ノーネー ノーチャー	
愛してるから来たんだ	ほっそりとしたいい女子

(5) 別れの歌

中部地方カーンチャナブリー県パノムトゥワン郡にしかない歌で、助け合いの農作業（結）が終り、さあ、これでお別れという歌である。男女が交互に歌い合うという形式を取り、ゆっくりとしたテンポでことば少なく別れがたい気持ちをこめて歌う。

この歌の特徴は、「さあ、別れよう……」で始まり、例えばある日稲刈りが終わった後の別離の気持ちを歌う。

(6) 米をを篩にかける歌

稲刈りの後、牛の力を借りて打穀をした後、その広場で歌う。

(7) 住居の歌

中部地方ラートブリー県バングペー郡ポーハック村にあるもので、打穀作業の休み時間に、手助けに来た人たちに食事を振舞い、村の芸達者な人たちを呼んで歌ったり踊ったりさせる。歌は男女の掛け合いである。

(8) 藁片付けの歌

米の打穀作業などが終ると、もみは倉にしまわれ、藁だけが作業場に残る。この藁くずをしかるべき場所に積み上げる作業が終ると、ほっと安心、そこで村人が浮かれ出て、藁片付けの歌を男女掛け合いで歌うことになる。中部地方のラートブリー県、カーンチャナブリー県にある。

(9) ゴミ屑ふるいの歌

もう何にも使えないゴミ屑や発育不良の米粒などをざるを使ってふるい分けるときに、男女が応答し合うように歌う。跪いて歌うもよく、立って歌うもよい。中部地方のナコンパトム県、ラートブリー県、カーンチャナブリー県、アーングトーング県などで歌われる。

(10) 板引きの歌

収穫した籾を一箇所に集め、板を使って移動させやすいようにしておく。その籾を必要に応じて引っ張り出すときに、若者たちが、または男女が組になって左右から板を引っ張り、歌って楽しむ。

【ソクラーン祭りとその前の歌】

(1) 願をかける歌

ソクラーンと呼ばれるタイの旧正月（4月13日から3日間）になると、若い男女が寺の本堂に集まり、パーン（脚のついた盆）に花を乗せたものを手にしながら、男の方が歌い出すと、女がそれに答えて歌う。内容は何でもいいが、その歌を通して相手の気持ちをうかがうもの、愛情を確かめるものが多く、時にはとてもユーモラスなのがある。中部のウタイターニー県、ナコンサワン県にあり、例えば次のような歌がある。

さあ、僕の願いごとは 片手にはパーンがあつて

それには蓮の花しかないが たとえどんな運命に生まれても
どうか僕を夫にしておくれ（女の名を言う）

そこで女が答える。

さあ、わたしの願いごとは 片手にパーンがあつて
それにはケーの花しかないけど たとえどんな運命に生まれても
どうかわたしをあなたの母親にしておくれ（男の名を言う）
（筆者注＝妻ではなく、母親にしておくれというところに遊びがある）

(2) 花輪の歌

中部地方アーングトーング県、カーンチャナブリー県、ラートブリー県、ペップリー県などに見出されるもので、タイの年中行事のとき、例えば灯籠流し、まげ落とし（昔の元服）、剃髪儀式、カティン祭などに歌われる。60代以上の高齢者が輪になって、掛け合いで歌ったり踊ったりする。ここでいう花輪というのは、花を糸に通して輪状にしたものである。

(3) ソングクラーン（旧正月）の歌

タイで最も暑いこの頃は、水掛け祭りが盛んで、いろいろな行事があつて楽しい季節でもある。聞き手を踊る気分にするような、ユーモラスで挑発的な歌で、やはり中部地方によく見出される。

(4) からかいの歌

中部地方のアーングトーング県、スパンブリー県に見出される滑稽な歌で、ソングクラーン祭りの頃皆が輪になって歌う。太鼓や拍子木は使わず、手を叩いて踊る。ことば数は少ないが、男女が互いにそしり合う。誰かが歌い出すと、他の人がそれを受ける。例えば、

男 さあ、捕まえたぞ 女を家へ連れてって（合いの手が繰り返す）
飯を炊かせて おっかさんに食べさせる
飯がまずかったら 女をしこたまぶん殴る
やったぜお父さん、ハイヤー、パジュアアップ、パイパイ、ジュイジュイ
「やったぜおとつあん」のところで男が皆一斉に大声をあげる。そこで女の方がこう答える。

女 さあ、捕まえたよ 男を家へ連れてって（合いの手が繰り返す）
軒下に住まわせてやって 米の炊き汁を食べさせる
泥棒が入って来たら それ、吠えさせて
やったぜおっかさん、ハイヤー、パジュアアップ、パイパイ、ジュイジュイ

(5) 畑踊りの歌

中部のスパンブリー県などにある歌で、数人の男女が歌いながら受け答えをするものである。

(6) 踊りの歌

男女数人が円陣をつくって歌うのもあれば、男だけが二人、交互に歌うのもある。中部地方のパトゥムターニー県その他にある。

(7) 鳳凰の歌

中部のアユタヤ県にある歌で、歌いながら男女が相手の心を惹こうとする。巨木の枝や家の梁などを利用してブランコを作り、一人がブランコに座っているときはもう一人が揺ることになる。男がブランコに乗ると、その男が鳳凰の歌を歌い、他の人が合いの手になる。男がブランコから降りると女がブランコに乗って男の歌に答える。他の人はブランコを揺すったり、女の歌の合いの手になったりする。例えば女は次のように歌う。

あらあら、鳳凰の君よ 柔らかな羽で舞い降りる
タマリンドの森に入っていくよ
わたしはあなたを信じたいけど 信用しない
もしかするとあなたは気位が高い
(合いの手と一緒に) 鳳凰よ、鳳凰、偉大なる鳳凰
程よい時間が経つと次の遊びに移っていく。

(8) ジューイの歌

これを歌うには、まず長太鼓を叩いて村人を誘い寄せる。太鼓の音を聞いた人たちは浮かれ出て踊りたくなり、集まってくる。太鼓や大小のシンバル、笛などで雰囲気盛り上げると、やがて布を持った踊り手が太鼓の音に合わせて踊り出す。まず男が踊り出し、同じ列の、あるいは向かい側の女に自分の布を差し出して彼女の肩にかけるか、その体に巻きつける。するとその女は男と組んで踊ることになり、歌の台詞で男が求愛し、女がそれに応答する。二人の踊りがある程度続くと、今度は女の方が別の男に近づいて布を巻きつける。新しいカップルが踊り出すと、先ほどの男は踊りながら自分の元の位置に戻る。踊りは次から次へと新しいカップルをつくり、輪になって進んでゆく。歌の内容は踊り手同士の愛を繋ぐためのもので、男女それぞれが二句ずつ、思ったことを言って歌うのだが、夢中になって夜を徹することにもなる。踊るカップルがあまり多くなると、混乱を避けるために別に一人の歌い手が必要になり、各組では歌わない。この歌の一例を挙げてみる。(カーンチャナブリー県の男女が歌う)

男	皆さん今日は	この催しにおいで下さって
合いの手	皆さん今日は	この催しにおいで下さって……
女	ひれ伏してご挨拶	ともかくも尊敬する皆様に
合いの手	ひれ伏してご挨拶	ともかくも尊敬する皆様に……
男	手を上げて合掌	僕をどうかお許し下さい(合いの手が毎回同じ台詞を繰り返してゆく)
女	踊りも歌も	古くからのもので
男	カーンチャナブリーのジューイの踊り	催しの手伝いにやってきた
女	歌も踊りも	タイの文化
男	どこか違っていたら	どうか許してほしいもの
女	二人になって踊るのは	目にも美しく見えるため
男	歌うのも踊るのも	僕にはまだ慣れていないけど

女	踊る相手が誰であろうと	失礼なことはさせないよ
男	ジュエイ踊りの歌詞などは	長い太鼓の調子に乗せる
女	師匠の組が稽古をつける	タイの伝統的な踊りを
男	男女が踊るあでやかに	歌の台詞に導かれて
女	わたし習い始めたばかり	まだ踊りが分からない
男	合いの手が繰り返せとっている	言われたとおりにさ
女	しきたりを守って	よろしいように踊っています
男	友情をありがとう	君は親切なおなご
女	わたしは嬉しい	あなたを歓迎するわ
男	こんにちは僕の妹	君はほんとにいい女
女	こんにちはお兄さん	ほんとにたくさんの人出だわ
男	踊って歌を歌い出そう	君を誘って遊びたい
女	わたし気になることがある	兄さんに訊きたいことがある
男	何を訊いてもかまわない	君はすぐにでも訊いていい
女	このようなジュエイ踊りは	どこの風習
男	このようなジュエイ踊りは	タイの風習
女	あら、タイの風習？	だから大事にしてるのね
男	タイの本当の風習さ	黄色い絹服の女に言うておく
女	どこで踊っているの？	分かるように教えてよ
男	どこでも踊れる	その気持ちさえあれば
女	元々はどこ？	分かるように教えてよ
男	すべてを教えよう、麗しの君	まずはトゥワンの村で
女	トゥワンの村はどこにある？	分かるように教えてよ
男	トゥワンの村は、かわいい美人	つまりパノムトゥワンのこと
女	それどこの県？	どこの県に接しているの？
男	カーンチャナブリー県	スパンブリー県の近く
女	ジュエイ踊りはいつやるの？	分かるように教えてよ
男	いつでも出来るさ	気が合いさえすれば
女	どの季節が好きなの？	まともに答えてよ
男	ソクラーンの季節	または他の年中行事の頃
女	元服や剃髪の時	よくやるのかしら
男	剃髪や元服の時	面白いと思えばやる
男	僕と踊ろう	長いお預けはご免だよ
女	兄さんと踊る	それはよくないことよ
男	愛しているから踊る	僕をじらさないで
女	わたし踊りが下手だから	どうして一緒に踊れるの
男	君はあでやかによく踊る	なんとまあ、美しい
女	あなたは見事によく踊る	でも、わたしを待ったりしないでね
男	タティン・ノーンダ	太鼓の音が胸に響き入る
女	ノーティンダ・ノーンダ	まだわたしはあなたのものではない

男 草むらで待つよ 誰か邪魔者がいるのかい？
 女 ハンサムなあなたに言うの 誰もそんな人いないのよ
 男 誰もいないって？ 僕を愛すればいいじゃない
 女 誰もいないわ わたしはそれで満足よ

(9) 野象狩りの歌

中部のカーンチャナブリーに残っている歌で、もうこの歌は歌われなくなっている。「さあ、象を捕まえたぞ」で始まり、合いの手がそれを受ける。

(10) チャーチャオローム (言い寄る歌)

ソンクラーン祭りの頃好んで歌われる。中部のナコンサワンやウタイターニー県にある。寺の境内などで歌い、かつ踊る。大勢で輪をつくり、男女が掛け合いで応答しながら歌う。出出しは決まっている。

「チャー、ロームさんよ まるで雌象みたい マルムの木を抱きにやって来た」それを合いの手が受けると、「どんな捧げ物をして徳を積んだらあの女と一緒にになれるのか」などと男が歌い、それから歌と踊りが進行する。

(11) ヒンレーレーの歌

ソンクラーンの頃、ナコンサワンやピサヌロークで歌われる。円陣をつくり、急ピッチで手を叩き、踊りながら歌い、楽しく応答する。合いの手が「ヒンレーレー ヒンレーレー」と言うと、男が歌いながら出て来て踊り、女との掛け合い歌になる。いつ発生したのかは不明。

(12) 熱愛の歌

北部のウタイターニーやピサヌロークにある歌で、ソンクラーンに季節に歌われる。円陣をつくり、中央の男女が掛け合いで歌い、かつ踊る。他の人たちは手を打ってリズムを取り、二人が程よく掛け合った頃、ペアーが交代して踊る。歌の内容は男女間の愛で、男は愛している言い、女は愛していないと答える。出出しは次のように決まっている。

「俺の心はもやもや どうしたらこの気持ちが隠せるのか」そして合いの手が最初は2回繰り返して歌う。

男 すっかり徳積みをした 今日では愛し合おうぜ、お姉さん (合いの手が2回出出しを歌う)

女 すっかり徳積みをした 寝て夢に見なさいよ、お兄さん (合いの手)

男 僕どえらい徳積みをした 僕の思う女はいやになるほど誠意がない (合いの手)

女 男はやって来て愛すると言う 私失恋が怖いよ (合いの手)

男 粹におしゃれな身繕い これがターポー村の娘、なんともまあ、美しい (合いの手)

女 男はよく喋る 私愛してないわよ、あなた (合いの手)

男 お金は2パーツしか無いが テレビを買ってあげるよ、お姉さん (合いの手)

女 わずか2パーツのお金 まあなんとも恥ずかしい、お兄さん (合いの手)

男 以前は僕を愛していたのに 今はもう気が変わったの、お姉さん (合いの手)

女 私を愛しているのなら堂々と 父にそのことを言いに来て (合いの手)

(13) チャックヨー（綱引き）の歌

ソクラーンの季節になると、ウタイターニー県ターポー村の人々は寺へ寄進にやって来て、いろいろな歌と踊りを楽しむ。その中のひとつが「綱引きの歌」である。男女が円陣をつくり、中央で一組の男女が掛け合いで歌いながら踊り、ほどほどに歌うと次のカップルと入れ替わってまた踊る。周囲の人々は手を打って調子を取る。太鼓を叩くのも認められる。歌い終わった男女の各組は、互いに手を取って引っ張り合いを楽しみ、その後二つのグループに分かれて綱引きが行われる。男対女でもよいし、こちらの村と隣村の男女でもよい。

この歌は、男が次のように歌い出す。

綱引きをやろう いつもの夜香木のところで
今日は妹に会える（繰り返し）
よい人は皆おいで下さい（繰り返し）
（合いの手が言う。さあ、ぶらぶらしていよう 今日は妹に会える 今日は妹に会える よ
い人は皆おいで下さい よい人は皆おいで下さい ハア……ハイ）

すると女の方が次のように受けて歌う。

綱引きをしましょう いつもの夜香木のところで
今日は若者に会える（繰り返し）
お兄さん皆おいで下さい（合いの手が先ほどの台詞を言う）

(14) 精霊迎いの歌

中部地方のロップリーやナコンサワンその他で、ソクラーンの季節になると精霊を迎えるために歌う。

(15) 雨乞いの歌

中部地方一帯では、4月、5月、またはソクラーンの季節に、この歌が雨乞いの儀式に使われる。メス猫を籠に入れ、天秤棒を使って二人で担ぎ、何組もが列をなして村を練り歩く。天にいる神に雨を乞うためであり、村人はいやがる猫に水をかけ合って愉快にはしゃぐ。歌の形式はあるが、部分的に表現を変えてもよい。次のように始まる歌がある。

メス猫どもよ……
後家さんよ 子どもを売らないで 米が安くなる 果物が高くなる……

こんな台詞もある

坊さんと呼んできた 呪文を唱えてもらい雲を作った
芝居を三日も開演 禿げ頭をかち合わせた……

この歌はいつ誰が歌い出してもよい。語句は短くきっぱりとしているが、時々下卑た表現が混じり込む。しかし最後には、大声で次のように歌わねばならない。

雨が降ってきた！ 雨が降ってきた！

(16) 待ち焦がれの歌

3月4月になると農民は田畑の仕事が終り、女たちはこれから使う衣類のための綿を紡ぐ仕事に取り掛かるし、男たちは保存食を作ったり山へ入り込んでこれからの日常生活に必要な木材を切ったり焚き木を集めたりする。このような時期に女たちはしばらく顔を見ることの出来ない恋人や婚約者、あるいは意中の男への気持ちが募るので、その待ち遠しい思いを歌にして一人で歌う。この歌は中部のナコンサワンにしか見当たらず、この歌を1982年に歌ってくれたのは、当時90才のヤーイチーン・プムチャルーンという婦人であった。その歌は、

待ち遠しいの どうして妹のわたしを捨てて
マプルックの森に入ったの
妹に会えるのは夢の中だけ
わたしに会えるのは わたしを思うときだけ
マプルックの森の中で あなたわたしを忘れないで どうか忘れないで……

待ち遠しいの どうして妹のわたしを捨てて
クラトーンの森に入ったの
頭を上げて顔におしろいをつけると
涙がぼろぼろ
ぼろぼろぼろぼろ……

待ち遠しいの どうして妹のわたしを捨てて
マカックの森に入ったの
人に聞かれても恥ずかしくない
わたしの膝に乗せてあげるから
あなたふさぎ込んだりなさないで
わたしが愛していないなどと
ぜんぜん愛していないなどと……

待ち遠しいの どうして妹のわたしを捨てて
奥深い森に入ったの
あなたがミアング（噛み茶）のようだったら口に押し込み
ビンロウジ（檳榔子）のようだったら口に入れ
道に着いたら下ろして見つめる
深い森の中で あなたわたしを忘れないで けっして忘れないで……

(17) 剃髮式（仏門に入る儀式）の歌

仏教国のタイでは、成年に達した男が剃髮して一定の期間仏門に入るということは重要なことである。カオ・パンサー（安居入り 筆者注＝雨季の期間で陰暦の8月下弦第1日から同11月上弦第15日までの3ヶ月をいい、僧侶はこの期間所属する寺院に留まって修行を重

ねるし、成年の男が好んで仏門に入るのは、この安居入りの少し前である) 剃髪を済ませた青年が親戚や友人と共に本堂の廻りを三度回り、これから本堂に入って所定の儀式をする前に歌うのがこの歌である。男女が掛け合いで歌い、合いの手が入る。中部だけではなく北部、南部でも歌われる。

【季節外れの唄】

(1) テープトングの歌

少なくとも200年以上前から存在した、知られる限りで最も古い歌で、かなり高齢の人が聞いたことがあるが、ことばが下卑ているので覚える気にならなかったと言う。

(2) 掛け合いの歌

男女が掛け合う歌で、ラーマ六世(治世1910~1925)作の文学作品『サクンタラー』の中にも出てくるが、現在これを歌いこなせる人は少ない。

(3) 野生鶏の歌

今は消滅した歌であるが、少なくともラーマ二世時代(治世1809~1824)からラーマ四世時代(治世1851~1868)には存在していたと思われる。

(4) 水牛にもたれかかる歌

平静でありながらも悲しい調べで歌う歌で、一人で歌うものもあり、男女が掛け合い、三人で歌うものもある。思案し嘆き悲しむ内容の歌が多い。例えば妻に情夫ができた話、男が密かに愛する女を奪って逃げ、その途中小鳥の囀りや美しい木々を褒め称える話などである。

(5) 子どものための歌

子守唄を含む子どものために歌う歌で、いつ頃から歌われ始めたかは不詳。歴史学者であるダムロン親王(ラーマ五世王の異母弟、1862~1943)が編集した最初の本(出版年不詳)には、「子を寝かせるための歌」、子どもに興味を抱かせるための歌、「子どもに歌わせる歌」の3種に分類されている。また、南部のナコーン・シータマラート(山田長政の果てた地)には、「長政を恐れる子守唄」が未だに残っている。拙訳で紹介すると、

坊やよく聞け みんなよく聞け
アユタヤ下りの日本の殿(山田長政のこと)が
我が物顔で町中荒し
子どもは捕まえ
女子も若い衆も 町中さらいまくって
思うがままにするんだよ

(6) 乞食の歌

雨季が終る頃、夫婦が二人で、または気の合った男が二人で、あるいは任意のグループで船

に乗り、太鼓やシンバルなどで調子を取りながら歌い、かつ踊り、あちこちの農家を訪ねて米や魚、乾物、果物を受け取り、それらを僧侶に捧げる。本物の職業的な芸人ではなく、帽子をかぶりみすばらしい服装で移動するのだが、本当の乞食ではない。彼らを迎え入れて楽しもうとするスポンサーは、歌い手を芸人または芸術家の一人であると見て尊敬することもあり、歌い手の方も自分は「普通の人」の状態を捨てて他の人の徳積みに貢献する「天国への階段」のようなのだと自負する者もいる。

(7) 即興の掛け合い歌 (男女)

プレーン・チョーイといい、少なくともラーマ五世時代(1868~1910)にはあったと言われる。葬式などがあつたときによく雇われて歌うことが多く、歌い手は職業的なレベルの人である。リズムを取るのには手を叩くだけでよいが、拍子木を叩いてもかまわない。歌い手は男女の二人で、あとは合の手で、一節が終る毎に「エーチャー エッチャーチャー チャーチャー ノーイメー」などと調子を取る。

(8) 盛装の歌

歌い手は男女ともほとんど職業歌手であり、庶民的なリケエ芝居の俳優のような服装をする。内容は有名な文学作品の中から取ってきたものを主体とし、始まる前に男女即興の掛け合い歌を一時間ばかり歌う。手拍子は使わずに楽団が歌と踊りを盛り上げる。

(9) ラムタット (掛け合い物語の歌)

男女が掛け合って歌いながら、物語を進めていくもので、葬儀などの催し物のときなどに歌われる。娯楽的な要素が強い。

(10) バーンナーの踊り歌

ワイクルー(師を敬う)の台詞を男性歌手が歌ってから女性歌手が出て来てワイクルーの台詞を歌い、二人で交互に歌いながら踊る。



稲刈りの手を休めて

(11) エーオクラオーソーの歌

「エーオ」という語で始まる歌で、「エーオ」は「女性を口説く」という意味。「クラオーソー」というのは「胡弓で」の意味である。中部地方の歌で、まず男の歌い手が師を敬ってから女性がそれにしたがって同じことをし、男女の掛け合い歌となり、創作的な即興歌になる。しかるべき時間が経つと、古典文学「クンチャーンクンペーング物語」などに合わせて歌が進行することになる。

(12) 挑発の歌

中部のspanbrリーに発生し、隣のアーングトーングでも歌われる。起源は不明だが、以前は男女の掛け合いによる求愛の応答歌だったものが発展したものとも考えられる。男女が半数ずつ輪になって、あるいは列をなして向き合い、掛け合いで歌を応答するのだが、テンポは速い。現在の歌い手はプロばかりである。



タイ農民の踊る風景